
緋弾のエリア ―情報科の強襲科生徒―

卯月 麦秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 一情報科の強襲科生徒一

【Nコード】

N1784U

【作者名】

卯月 麦秋

【あらすじ】

東京武偵高に通う如月俊一はある男を探しながらも、ごく平凡な学校生活を送っていた

しかしそんな平凡な生活をぶち壊す恐怖の大王が降ってきた
神崎・H・アリアという強襲科の超エリートが・・・

プロローグ（前書き）

はじめまして

卯月 麦秋と申します

今回初めて小説というものを書かせていただきました
いろいろとパクリがあったりしますがそこは目をつむって許して下さいね

プロローグ

俺はなにがあっても忘れない
夜空に浮かぶ満月の下で俺からすべてを奪ったあの男を！

俺の名は如月柊一

東京武偵高校一通称武偵高に通う情報科^{インフォルマ}の2年生だ。

春休み明けの今日、俺は珍しく寝坊してしまった

「まづったな」

俺はそう呟きながら、電池の切れた目覚まし時計兼用の携帯電話を恨めしい目で睨んだ

壁の時計を見ると時刻は7時55分を指していた

「こりゃ完全に乗遅れたな」

そう言いながら俺はモソモソと制服に着替えた

因みにいつも乗るバスはホームルームに間に合う最後のバスで、3分後に近所のバス停に着く

そしてこの部屋からバス停までは全力で走っても5分は掛かる

そのため俺は愛用の400ccバイクで学校に向かおうと決めて、優雅に紅茶・・・は無いので緑茶をずずっと行儀悪く啜っていた

だが俺はこの行動から数分後、7時58分のバスに乗れなかったことをものすごく後悔することになる

なぜなら出会ってしまったからだ、後に犯罪者達から『緋弾のアリア』として恐れられる神崎・H・アリアと・・・

第01弾

学校までの道を鼻唄混じりにバイクを走らせていた俺は今、開いた口が塞がらなくなっていた

なぜなら車輜科^{ロジ}の武藤に改造してもらった俺のバイクの隣をセグウェイが併走してやがるからだ

このバイク、普通に90kmは出てるんだが？（因みに最高速度は300km、400ccでここまで出せるとは・・・流石は武藤だな）

しかもそのセグウェイには人ではなく、スピーカーとイスラエルIMI社のサブマシンガン、UZIが自動銃座に改造され乗っているのだ

そんな状況に呆気にとられている俺に対してセグウェイは

「その バイクには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります」

とか言いだしやがった！

俺はなにかのイタズラかと思ったが、一応バイクを確認してみると本当に爆弾がありやがった！

しかもご丁寧に燃料タンクの前の下の方にバイクと同じ色に塗装して目立たないようにして貼り付けてある

「おいおい、何の冗談だよ・・・！」

しかしセグウェイはなんの返答もよこさない

仕方ないので俺は、速度を落としながら今の状況を整理していくことにした

爆弾は触った感触からプラスチック爆弾のC4であることがわかった
しかもこのバイクを木っ端微塵にできるどころか、ビルも吹き飛ばす
大きさだ

「こりゃ本当にヤバいな・・・」

俺はそう言いながら、数ヶ月前にあった武偵連続殺人事件―武偵殺しに今回の手口が似ていることに気がついた

だが、あの事件の犯人は逮捕されたはずだ

てことは今俺を死へと追いやろうとしているのは武偵殺しを真似た模倣犯の仕業か

なるほどなく、それで偶然バスに乗り遅れた俺が標的になった、と

「つて、んなこと呑気に考えてる場合じゃねー！」

思わず叫んでしまった俺にセグウェイは

「黙らないと 爆発 しやがります」

なんて言ってきた

騒いだから爆死、なんてのは勘弁願いたいので俺は仕方なく黙ってこの状況をどうやって打破するか考えていると、目の前にチャリでセグウェイと併走している奴が見えた

しかもあれは1年の時のクラスメイト、探偵科の遠山キンジだな

インクスタ

俺はキンジのチャリと併走しながら遠山に声をかけた

「よう、キンジ！ お前もか？」

「ん？ ああシュウか！ お前もかってことはもしかして・・・」

「ああ、俺もだ」

俺は涙を流しながら笑顔で親指を立てて言ってやった

「で、どうするシュウ？ 俺は一応ひとけのない第2グラウンドを目指してるんだが」

「どうするって言われてもな」

とか話し合いをしていたら

「飽きてきたので 後2分で 爆発 しゃがみます」

「「なにー!?!」」

俺とキンジは同時に叫んでいた

飽きてきたっておい・・・

なんて心の中でツツコミを入れながら焦っていると、ちょうど第2グラウンドが見えてきた

その第2グラウンドに入った瞬間、俺達はこのありえない状況の中、さらにありえないものを見た

グラウンドの近くにある7階建て女子寮の屋上の縁に女の子が立っていた

武偵高の制服を着た、長いピンクのツインテールをなびかせた女の子だ

そんな彼女はいきなり飛び降りた

飛び降りた？

「「はいいいい!?!」」

これまたキンジと一緒に叫んでしまった

そりゃそうだろう、目の前でいきなり飛び降りられたんだからな

しかし、女の子はパラグライダーを展開していたらしく、飛んでいた

とりあえず生きていたのには安心したが、まずい事に女の子は爆弾持ちの俺達の方へ飛んできた

キンジも気づいたらしく

「バツ、バカ！ 来るな！ この自転車とバイクには爆弾がー」

と、警告していた

しかし、彼女はまっすぐこっちに飛んで来ながら、左右のふとももから銀と黒の拳銃を抜き出した

あれはガバメントか？

などと呑気に女の子の銃のことを考えていると

「ほらそのバカ2人！ さっさと頭を下げなさいよ！」

言いながら、俺達が頭を下げるよりも早く、問答無用でセグウェイを銃撃してきた

しかも全弾命中だど！？

なんて腕だ・・・！

ありやアサルト強襲科とみて間違いないが、あんなやつ俺のデータにはないぞ？

東京武偵高の全生徒のデータは持っているはずだが・・・

などと考えていると、彼女は銃をしまって俺達の頭上を越えてUターンしてブレイクコードにつま先を突っ込みながらこちらに向かってきた

そこで俺は彼女のやろうとしていることが理解できたのでキンジを彼女に托すことにした

「おい、お嬢ちゃん！ 俺はいいからそいつを助ける！ 俺は自分でなんとかする！」

言いながら俺はバイクのアクセルをめいっぱい回した

「え？ ちょっ、あんた！」

後ろからそんな声が聞こえたが気にしない

当たり前だろ？

こっちはバイクで燃料を積んでるんだからな

俺はこの先にどこかのバカがこの間の演習で開けた大穴があることを思い出した

それを見つけた俺は、バイクを横倒しにしてバイクから飛び降りた
すると、バイクは大穴に吸い込まれるようにして滑っていき、バイクが穴に落ちた瞬間、穴から大きな音と共に火柱が出現した

「2分って意外と短いんだなあ」

なんて言ってる場合じゃない、キンジたちは無事か？

2人が気になった俺は2人を捜すためにきた道に戻った

すると、セグウェイ数台が体育倉庫を囲んでいるのが見えた

てことはあいつらはあの中か・・・お、誰か出てきたな

あれはキンジだな

しかし、いつもと雰囲気が違うような・・・

ああ、あれが噂に聞くキンジの本気モード『ヒステリアモード』か！

遠山家は代々その超人モードを使って正義の味方をやっているらしく、あのモード中はすべての能力が30倍になるとか

俺も実際に見たことはないのですが本当かどうかは知らないがいい機会だ、いつもと違うキンジの腕を拝見させてもらおう

ということで俺は茂みに隠れてキンジの戦いぶりを拝見してもらうことにした

すると、キンジを認識したらしいセグウェイ達は、キンジめがけて一斉射撃をはじめた

しかし、キンジはこれを全弾避けた！

その避けた姿勢からM9を取り出しキンジは発砲

しかも発砲した全弾をすべてのセグウェイの銃口に叩き込んだ！

セグウェイはすべて爆発、キンジは当然だという顔で銃をしまいながら体育倉庫に戻って行った

なんて野郎だ・・・噂では聞いていたがまさかここまでとは・・・

ヒステリアモードおそろるべしだな

さて、キンジの力も見れたことだし早いとこ学校へー

ばぁん！

そんな音が体育倉庫の方から聞こえてきたと思ったら、キンジが逃げるように出てきた

「逃げられないわよ！　あたしは逃走する犯人を逃がしたことは！
1度も！ない！」

その後ろをさっきの女の子が日本刀を背中から二刀引き抜きながら出てきた

あの様子からしてキンジが彼女を怒らせたのだろう

それにしても、双剣双銃とはこれまたすごいな

なんて感心しながら2人の鬼ごっこを眺めていると、

ガシャン！

という大きな音が後ろの方から聞こえてきた

なんだ？

そう思いながら後ろを向くと、なんと！ さっきのセグウェイが大群で押し寄せてきた！

キンジ達も気づいたらしく、鬼ごっこをやめ、戦闘態勢に入っていたしかし、女の子の方は弾が切れたらしくさっきの日本刀を構えている数にして50台はいるであろうセグウェイに刀のみで挑むのは無謀だ仕方ない、俺のを貸すか

俺はそう決め、隠れていた茂みから走りだしながら、ブレザーの中に手をつ込み、愛銃のCZ75を取り出した

突然出てきた俺に驚いてる彼女に対して

「ほらお嬢ちゃん！ こいつを使え！」

俺はそう言いながらCZを予備のマガジンと一緒に彼女に投げてやった

「あんたはどうやって戦うのよ！」

CZをキャッチしながら彼女が聞いてきたので

「大丈夫だ！ 他にも持ってる！」

そう言いながら、俺はブレザーの右袖から日本刀を左手で引き抜き、左袖からクナイを2、3本右手で引き抜いた

「なっ！ あんた手品師かなんかなわけ！？」

「いんや、ただの情報科インフォルマに所属している武偵だ」
なんてやり取りをしていると

「ほらおふたりさん、お話しはここまでだ。来るぞ！」

キンジに言われて振り返るとセグウェイはすぐそこまで迫っていた

「そんじやいきますか！」

言いながら俺はセグウェイの山に突っ込む

俺は日本刀を逆手に持ち替え近く of セグウェイを問答無用で切り裂いた

セグウェイは接近した俺が1番狙いやすいと判断したらしく一斉に俺に向かってきた

そこをキンジと女の子が銃撃、俺の周りのセグウェイが破壊されていく

2人ともいい腕だ

と、感心しながらクナイを投げてセグウェイのUZIの引き金を破壊し無力化する

クナイが手から無くなったらブレザーからまた出し、刀で牽制しつつ投げる

そんなふうに戦っているとセグウェイはいつのまにか全滅していた
俺は動くやつがないことを確認して、投げたクナイを回収しながら
キンジに話しかけた

「いやー、流石だなキンジ、強襲科の時のSランクは伊達じゃない
な」

「そんなことはないさ、俺はアリアが見てくれたから戦えただけ
さ」

ん？

女嫌いで有名なキンジが女たらしみたいなのを言ってるぞ？

これもヒステリアモードの作用か？

などと考えながら女の子にも声をかけた

「そういえばお嬢ちゃん、なんでキンジを追いかけてたんだ？」

「シ、シュウ！ それはもう済んだー」

「！！ そうだったわ！ あんたよくもあ、あたしにあ、あんなこと
とを！ そっちのあんたも！ あたしはお嬢ちゃんじゃない！ 高
2だ！」

「えゝ！？ 同年だったのか！」

と、俺が驚いて目を丸くすると

「ムキー！ もう許さない！ ひざまづいて泣いて謝っても、許さない！」

言いながら彼女は俺のC Zをこちらに発砲してきた！

うおっ！ 危ねー！ 弾渡しすぎたか！

「まずい！ シュウ、逃げるぞ！」

俺とキンジが駆け出すと、彼女も俺達を追いかけて来ようとするが

「待ちな・・・みゆおきゃ！」

盛大にコケていた

よく見ると彼女の足元に弾が撒き散らされている

横を見るとキンジが空のマガジンを持っていた

なるほど、あれはキンジの仕業か

「この卑怯者！ でっかい風穴一開けてやるんだからあ！」

そんな声が後ろから聞こえてきたが、俺は無視して逃げることにした

あっ、俺のC Z・・・

後クナイも回収しきってないし・・・

どうすっかな

第01弾（後書き）

人物紹介

氏名 如月柊一きづきしゅういち

東京武偵高校2年生

身長…175cm

体重…60kg

使用武器…CZ75FA（FAフルオート）

日本刀

クナイetc…

弾02弾

その後、あのアリアとかいう子から逃げてきた俺とキンジはマスタース教務科に事件の報告をして新しい教室に向かっていた

どうやら俺とキンジは同じ2年A組らしい

しかし、キンジの顔はこの世の終わりだと言わんばかりになっていた

「どうしたキンジ？　せつかくのイケメンが台無しだぞ？」

と、俺が冗談交じりに聞くと

「お前も見ただろ？　あの時の俺を・・・」

「ああ、ヒステリアモードの？」

なんだそんなことで、と言葉を続けようとした時

「なんで名前まで知ってんだよ！　高校に来てからは誰にも言っていないぞ俺！」

キンジは俺がヒステリアモードのことを知っているとは思わなかったようだな

「俺の情報網を舐めんなよ？」

「・・・はあ。せつかく隠してきたのにお前の情報の前では意味なしだな」

「お褒めに預かり光栄です」

「褒めてねえよ・・・」

「でもな、俺も名前と効果しか知らないんだよ。だからさ、この際包み隠さず俺に話せ、な？」

キンジは心が折れたのか、すんなり俺に話してくれた

ヒステリア・サヴァン・シンドロームーつまりヒステリアモードは性的に興奮すると発動するらしい

しかも副作用として女子を、何がなんでも守りたくなるのと、キザな言動になってしまうらしい

そして中学時代にこれがクラスの女子にバレて、利用されまくったらしい

なるほど、だからキンジはヒステリアモードにならないために女子を避けていたのか

「今のこと誰にも言うなよ？」

話したことで吹っ切れたのか、キンジはもう落ち込んでいなかった

「おう、俺は秘密は守る主義だ」

「情報科のやつにそんな言葉を言われても信用できんがな・・・」

「じゃあなんで話したんだよ」

「お前にはいずれバレるだろうからな。ならいっそ先に言っちまえ
と思ってな」

「なるほどね」

と、ちょうどいいタイミングで教室に着いたな

どうやらもうHRは始まってるらしく教室からは先生の声が聞こえる
少し気まずいが遅れたものは仕方ない

俺は精一杯の笑顔で、キンジも下手な作り笑いで教室のドアを開けた

「すいませーん、遅れー」

「先生、あたしはアイツらの隣がいい」

ドアを開けた状態で俺たちは硬直していた

なぜなら目の前にいたからだ

黒板に神崎・H・アリアと書いて、あのピンクのツインテールが！

しかも俺達を指してそんなことを言うもんだから、クラスメイトの
バカ共が一斉にこちらを見て歓声を上げた

「お前ら遅刻して来といてこんなかわいい女の子に隣がいいとか言
われやがって！」

「あの昼行灯の遠山に好意を持つ女子がいたのか！」

「あの情報と幼なじみにしか興味が無い如月にもだぞ！」

何なんだこのクラスは・・・みんな揃いも揃って言いたい放題だな・

・

てか俺、情報はともかく幼なじみには興味が無いのだが・・・あいつはほっといたら大変だから世話を焼いてるだけだ

俺達はとりあえず席に向かった

俺とキンジは隣どうしのようにだ

席に着いた時やっと声が出たのだろう、キンジが抗議していた

「な、なんでだよ・・・」

しかし周りの歓声に掻き消され隣の俺にしか聞こえていないようだ

哀れキンジ

と、そこで俺から見てキンジを挟んで右側に座っている大男が席を立ち上がり

「よ・・・良かったなお前ら！　なんか知らんがお前らにも春が来たみたいだぞ！　先生！　オレ、転入生さんと席代わりますよ！」

満面の笑みでそんな言葉を言い放っていた

この身長190cmはあるツンツン頭が俺のバイク（さつきブツ壊れた）を改造してくれた、武藤剛気

乗り物と名の付く物ならなんでも運転できる特技を持っている

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねえ。じゃあ武藤君、席を代わってあげて」

おい先生！ 俺達に拒否権はなしか！？

わーわー。ぱちぱち

クラスの連中、ついに拍手喝采を始めやがった

こいつら・・・後で個人情報ネットに晒してやる・・・

そう心に決め、今騒いでいるバカどもの顔を覚えていると、アリアが近づいて来て

「はい、キンジとシュウ。さつきのこれ返すわ」

と、俺達を呼び捨てにしながらキンジにはベルトを、俺には袋を投げてきた

なんだ？

そう思い袋を開けると、中には俺のCZ75とクナイが入っていた
わざわざクナイまで回収してくれたのか

しかもCZの弾は渡した分と同じ弾数入ってるな・・・そこまでしなくてもいいのにな・・・ん？

ちよつと待てよ、俺に銃を返したのはわかる。しかしキンジにはベルトだと？

たしか、ヒステリアモードの発動条件は性的興奮、てことはまさかキンジのやつアリアに・・・！

「おいキンジ。お前神崎に何した？」

「いや何もしてないから」

「じゃあなんで神崎がお前のベルトを持ってたんだよ」

「それは――」

「理子分かった！ 分かっちゃった！ これ、フラグばっきばきに立ってるよ！」

と、俺の左隣に座っているヒラヒラフリルだらけの武偵高の制服に身をつつんだ女子が、ガタン！ と席を立った

彼女の名は峰理子、探偵科ナンバーワンのバカだ

「キーくん、ベルトしてない！ そしてそのベルトをツイントールさんが持ってた！ これ、謎でしょ！？ でも理子には推理できた！ できちゃった！」

ええい！ 人の前でぴよんぴよん跳ねるな！ うっとうしい！

てか探偵科一のバカが推理できただと？　なんか面白そうだな・・・

よし、ここは黙って聞いておこう

そう決めて、俺は懷から缶コーヒーを取り出して蓋を開けた

「キークンは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！
そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！　つまり2人は―熱い
熱い、恋愛の真っ最中なんだよ！」

理子がそうぶちまけた

ハッハッハ

こりゃまた面白い、キンジが恋愛？

アホらしい、キンジの女嫌いは有名だしキンジが恋愛なんてしたら
白雪が鬼になるぞ

ちなみに白雪とはキンジの幼なじみでキンジLOVEな生徒会長だ

鈍感なキンジにはその思いが伝わってないがな

やっぱりバカだな理子は、なんて思いながら缶コーヒーに口をつけた時、推理し終えたはずの理子がまたしゃべりだした

「それだけだと彼女がひーくんの銃を持っていた理由が分からない
よね？」

とか言い出した

ちなみにひーくんとは俺のことだ

何故ひーくんなのかというと、柊一の柊が『ひいらぎ』と読めるからだ

てかちょっと待て、そこで俺をだすのか？

「これも理子には分かっちゃった！ ひーくんもキーくんと一緒に彼女に何らかの行為をした！ それはひーくんの制服も物語っているよ！」

ブーッ！

俺は思わず缶コーヒーを吹き出しながら自分の制服を見た

・・・なんてこった、社会の窓が開いてやがる

キンジはベルトを渡されたし、ヒステリアモードになっていたからつじまじが合うだろうが、何故社会の窓が開いていただけで俺までそこに入る！？

理子は人の気も知らずにさらに続ける

「つまり2人とも彼女のカレシなんだよ！」

いやいやいや！ 2人ともカレシって、誰がどう考えてもおかしいだろ！

しかし、クラスのバカ共は理子の推理を真に受けたらしく

「お、お前ら転入生さんと恋人だと!？」

「如月! お前にはかわいい幼なじみがいるだろ! あんなかわいい子を捨てるのか!？」

「遠山! お前は女嫌いじゃなかったのかよ！」

「いや待て! 遠山にはすでに白雪さんというお嫁さんがいるじゃないか！」

「いや、遠山は鈍感だからな・・・白雪さんの好意にも気づかず・・・」

「如月! 後で体育館裏来いや！」

お前ら、新学期なのにどうでもいいことだけ息合いですぎだろ!

「お、お前らなあ・・・」

俺の隣でキンジがそんな声を上げながら机に突っ伏そうとしたその時――

ずきゅんきゅん!

うおっ! 銃声!?

今俺の髪を何かがかすめたぞ!

かすめたのはもちろん銃弾で、それを撃ったのは――

「れ、恋愛だなんて・・・くっだらない！」

ガバメントを構えながら、そう言い放ったアリアである

理子は前衛舞踏みたいなポーズで体をよじらせたまま着席

武偵高では、射撃場以外での発砲は『必要以上にしないこと』となっている

つまり、してもいい

だが新学期の自己紹介で発砲したのは、アリアが初めてだろう

「全員覚えておきなさい！　そういうバカなことというヤツには・・・

」

それが、神崎・H・アリアが武偵高のみんなに発した―最初のセリフだった

「―風穴あけるわよ！」

第03弾

昼休み。俺はそれまでの休み時間で質問責めに遭っていたことから、チャイムが鳴ったと同時に教室から飛び出し、全力疾走で逃げ出していた

ここまで来れば大丈夫だろう

そう思い、俺は屋上で足を止めた

はぁ・・・何で俺がこんな目に・・・

クラスのバカ共め・・・本当に個人情報晒してやる

そう固く心に誓い、ブレザーから缶コーヒーとサンドイッチを出し、フェンスにもたれながら食べていると突然目の前が暗くなった

「だーれだ？」

そんな声が背後から聞こえてきた

どうやら手で目を隠されてるらしい

誰だもなにも、こんな事を俺にしてくるヤツなんて1人しかいない

「日向だろ？」

「あつたりー！ さっすがシュウくん！」

「いや、お前以外にこんなことするヤツいないから」

手がどかされたので後ろを振り向くと、案の定、背が俺より頭1つ分小さく、髪は右側でお団子にして結っている女の子が立っていた

いわなくても分かると思うが、これが朝クラスのバカが言っていた俺の幼なじみの長月日向だながつきひなた

さっき俺がバイクを爆発させた時に利用した穴を開けた張本人である

強襲科アサルトに所属していてランクはA、グラウンドに穴を開けた事も含めて数々の問題を起こしているため校内では有名人だ

そういう問題を未然に防ぐために俺が世話を焼いているのだが、全く効果がない・・・

「で、何の用だ？」

「決まってるじゃん！　一緒にお昼食べよ！」

「はいはい」

こいつと昼を食べるのはいつものことだ

俺はフェンスから離れ、日向の隣に座った

日向の昼は手作り弁当だ

「相変わらず手の込んだ弁当だな」

「えへへ、シュウくんにも作ってあげようか？」

「いや、遠慮しておく」

「えー！　なんでよー！」

「俺なんかのためにお前の時間を割く必要ないだろ？」

「むー！」

なぜそこでふくつれつらになる！？

俺は当たり前のことを言っただけだろ！？

「・・・シュウくんの鈍感」

「何か言ったか？」

「何でもありませんよーだ！」

なんだ？　何で怒ってるんだ？

まあいいか、こいつはよくわからんのはいつものことだ

「そういえばシュウくん、アリアちゃんと何かあったんだって？」

ブッ！

おもいきりコーヒーを吹いてしまった

「わっ！ シュウくん汚い！」

「ごほっごほっ！ お前が変なこと言うからだろうが！」

「何言ってるの？ 校内ではもう皆知ってるよ」

「な、なんだと！？」

なんてこった、もう校内で話題になってるのか・・・

「まあ、原因はアリアちゃんなんだけどね」

「どういふことだよ？」

「アリアちゃんね、シュウくんや遠山くんのこと全校生徒に聞いて回ってたんだよ」

「な、なにー！？」

あの女・・・なんてことをしてんだよ！

「後、^{マスタース}教務科にも聞き込みに行ってたとか」

「はー！？」

教務科にまで行くか普通？

「学校掲示板もスゴイことになってるらしいよ？ 最新のスレッドが全部3人のことだとか」

「マジかよ!」

俺はブレザーからものスゴイ勢いでモバイルパソコンを取り出し、
学校掲示板を開いた

なんてこつたい、最新どころか表示できるスレが全部俺たちのこと
じゃないか・・・

「うわー、聞いてたよりヒドイねー」

日向が横からヒョコツと覗いてきてそう言った

「しかもほとんどが俺とキンジの悪口じゃねーか」

「あっ、ホントだ シュウくんと遠山くんの事ばっかだ」 すごい
人気だね」

「アホか!」

俺はポカッと日向の頭を軽く殴った

「痛ったーい!」

痛がってる日向は気にせず、さっきから気になってたことを聞いた

「そういえば日向」

「何よ」

日向はほっぺをパンパンに膨らませてこっちを睨んでいる

「そんな睨むなって、さっきは悪かった」

「うん、よろしい！」

謝ったらすぐに許してくれるのがこいつのいいところだ

「で、どうしたの？」

「ああ、お前さっきからアリアちゃんって言ってるけど、ひよっとしてアリアと友達なのか？」

「そうだよ」

「なら話は早い、あいつの強襲科での成績を教えてくれよ」

「いいよー！」

頼んだら何でも教えてくれるのもこいつのいいところだ

「アリアちゃんはね、とにかくすごい！　　なんたって卒業までの単位をもう獲得してるんだからね」

「へー、たしかにすごいな」

「後はね、友達はあるまいいないみたい」

「どうしてわかるんだ？」

「だって私以外の誰かと話してるの見たことないもん」

「ふーん」

まあわからんこともないな、あんな性格だし

「犯人は一度も逃がしたことないとかいう噂もあるよ」

「マジで？ さすがにそれは信憑性に欠けるな」

「なら、いつもみたいに調べればいいじゃん」

「まあな、他には？」

「んー、それぐらいかな」

「少ないな」

「なにより、せっかく教えてあげたのに」

言いながら日向がまた膨れっ面になる

「悪かった悪かった、貴重な情報ありがとな」

俺は日向の頭を撫でる

「えへへ」

日向はとても満足そうだ

「と、ヤベー早く食わないと昼休みが終わっちゃう」

「え？ あっ、ホントだ！」

それから俺達は昼ご飯を食べてそれぞれの教室に帰った

まあアリアの事は午後からの情報科インフォオルマの授業中にでも調べるか

第03弾（後書き）

人物紹介

氏名…長月日向ながつきひなた

身長…160cm

所属学科…強襲科アサルト

使用武器…不明

第04弾

武偵高の授業は主に2つに分けられる

1つはどこの高校でも行われている一般科目で、午前中の授業は基本この一般科目だノルマーレ

そしてもう1つは、午後からのそれぞれの所属している学科の授業だ

つまり、俺の場合は情報科、日向やアリアは強襲科、キンジや理子は探偵科、というわけだインフォルマ
インケスタ
アサルト

そして今は午後。つまり俺はクラスメイトの質問責めから解放され情報科の授業を受けている

まあ授業の内容なんて知ってることばかりだから全く聞いてないがな

俺は授業を無視してアリアのことを調べている

知りたいことは自分で調べる

それが情報科・・・いや、武偵ってもんだろ？

パソコンで教務科マスターズ（普通は見れない）のページを開き、アリアの事を検索するとすぐにでてきた

なにになに

氏名…神崎・H・アリア

昨年度の3学期、東京武偵高に転入

ランク…S

ロンドンにいた頃はロンドン武偵局で武偵としてヨーロッパ各地で活躍

犯人逮捕件数99件（100％）

追記…上記の犯人逮捕はすべて1度の強襲である

マジかよ・・・

普通、武偵が犯人を逮捕する際は、何度か強襲をかけて犯人の逃走するときの癖などを見抜いて罠などを仕掛けて逮捕する

それをすべて1度の強襲で、しかもすべて逮捕するとは・・・

そういえばアリア本人も言ってたな・・・

『あたしは逃走する犯人を！逃がしたことは！1度も！ない！』

なるほど、あれは本当だったんだな

しかし、あいつの実力はわかったが、家庭の情報とかが1つも無いな
しょうがない、イギリスのサイトを漁るか

俺は教務科のページ（何度も言うが普通は見れない）を閉じ、イギ

リスの検索エンジンを開いた

おっ、いきなり引っかけたな

しかも有名な貴族のようだな

えーっと、氏名…神崎・・・っ！！

なっ！ アリアの実家があの家だと！？

まさかアリアがあの子孫とはな・・・

これは神がくれたチャンスか？

まあいい、10年間捜し回ったんだこれくらいの奇跡が起こってもいいだろう

しかし奴はとうの昔に死んだことになってる

奴を捜し出すにはまだ情報が足りない

だが、奴は子孫であるアリアの前に現れるかもしれない

なら話は早い、俺がアリアと行動していれば、奴と出会えるかもしれないんだからな

しかもアリアの方も俺やキンジのことを調べているらしいじゃないか
アリアがどういうつもりで俺達を調べているにしろ、俺はアリアからのアプローチを待てばいいだけだ

俺はそう決めて、パソコンを閉じようとしたが、朝騒いだクラスのバカ共の個人情報を掲示板に晒すという重大なことを思い出して再度ネットに接続したのだった

第05弾

放課後、俺は途方に暮れていた

「まさか、部屋に帰れないとはな」

遡ること30分前。授業が終わり部屋に帰ろうとしたとき、充電し終えた携帯に電話が掛かってきた

「誰だ？ 日向か？」

俺は画面に表示されている名前を確認した

「ん？ これは・・・」

そこには綴梅子つづりうめこと表示されていた

綴とはこの武偵高の2年B組の担任で尋問科ダキュラの教諭である

俺は綴とよく情報のやり取りをするため電話番号を交換している

だが、この時間に掛けてくるのはめずらしい

っと、余計なこと考えてないで早く出ないとな

彼女を怒らせると後が怖い

「もしもし？」

『おー、如月い？ 出るの遅いぞ？』

おっと、もうご機嫌斜めになりかけだな

「すみません、ところで今日はこういったご用件で？」

『あー、そうだった 如月い、お前今日部屋に帰ってくんな』

「へ？ それってどういう意味です？」

『そのままの意味だが？』

「いや、意味がわかりませんよ！ せめて理由を教えてください！」

『だーかーらー、あたしと蘭豹らんびょうが部屋を使わせてもらうって言うてんだろ？』

な、なんだと！？

部屋に来るのはいつものことだが、蘭豹が一緒だったことはなかったぞ！？

ちなみに、蘭豹とは強襲科アサルトの教諭だ

なんでよりにもよって蘭豹なんだ・・・

あいつの機嫌を損ねて無傷だった奴はいない

と、そこで俺はあることに気がついた

それは、電話越しに「ヒック」やら「プハー！」 仕事終わりはやっぱりこれだな！」なんて聞こえてくることだ

「先生、もしかして酔ってます？」

『あゝん？ られが酔ってりゅって？』

「ベロンベロンじゃねーか！ 今すぐ帰るから待ってろよ！」

おもわずタメ語でしゃべってしまったが綴は気づいてない

『らくらくらく、帰ってくんなって言ってるだりよゝ あたひたちはらいじょうふらからよ』

「どう考えても大丈夫じゃねーんだから、おとなしく待ってろ！」

『いろいろかゝ？ おみやえがさつき^{マスターズ}教務科のページひりやいてたのチクルぞゝ？』

「うっ・・・」

それをネタに脅されると反論できない

『安心しりょゝい、エロ本は探さにゃいから』

「そんなもんじゃないわ！」

『はいはい、男はみんなやそうゆゝぞ』

「うっ・・・」

これにも反論できない俺、だって男だもん

『まあそんなにやわけだからきょーわれかか部屋に泊まれ』

「ちよっ、待っー」

ブツッ

・・・切られた

「おいしいいいい！」

俺の悲痛の叫びは切られた電話を前に虚しく響いていた

これが30分前のやりとりである

「誰かの部屋に泊まれって・・・」

俺が途方に暮れていると

「おーい！ シュウくん！ 一緒に帰ろー！」

ああ、この声は日向か・・・

だが今の俺にはそれを確認するために振り向く気力すらない

「ちよっどシュウくん！ 無視しないで・・・ってどうかしたの？
この世の終わりみたいな顔してるよ？」

さすがにこの世の終わりみたいな顔ではないだろうが、日向に心配されるぐらい酷い顔になってるとは……

「いや、気にするな 部屋が綴と蘭豹に占拠されただけだ……」

「ああ、いつもの……でも蘭豹先生までセットなんて初めてだね」

「2人してベロンベロンに酔ってたからな、そのせいだろ……いつもなら部屋に帰れるんだが今回は帰ってくるなって言われたし」

「ありやりや。じゃあシュウくん誰かの部屋に泊まるの？」

「いや、まだ探してない」

「じゃああたしの部屋に泊まる？」

「いやお前女子寮だろうが！」

「ばれなきゃ大丈夫だって！ シュウくん気配消すの得意だし」

「そういう問題じゃねー！」

「じゃああたしと来なさい！」

突然、背後から聞きたくもない声が聞こえてきた

振り向くと案の定、トランクを持ったアリアが立っていた

ん？ トランク？

いや、気にするのはそこじゃないさっきのアリアの言葉だ

「えーっと、神崎？ 今なんて言った？」

「神崎じゃなくてアリアでいいわよ」

「じゃあアリア、さっきなんて言った？」

「何度も言わせるんじゃないわよ！ 一緒に来なさいって言ったのよ！」

「どこへだよ？」

「キンジの部屋よ」

「キンジの？」

「そうよ。ちょうどいいからあんたも来なさいってことよ」

ちょうどいい？

どういう意味かはわからんが、ついて行った方がいいだろう

「ま、いいだろう。キンジの部屋なら問題ないしな」

「ええー！ シュウくんあたしの部屋に泊まるって言ったじゃん！」

「言っとらん！」

日向はなにがなんでも俺を連れていきたいらしい

しょうがない・・・脅すか

「この間お前に頼まれて流出を防いだお前のファンクラブが撮った隠し撮り写真、流してやってもいいんだぞ？」

俺の言葉を聞いたとたん、日向の表情が変わる

「えっ！　ちょ、ちょっとそれだけはやめて！」

「なら俺はキンジの部屋に行く、それでいいな？」

「むゝ！　シュウくんのいじわる！」

そんなセリフを言いながら、ほっぺを膨らませて走って行ってしまった

・・・さすがに酷かったかな

「あんた、鬼ね・・・」

隣で見っていたアリアが言う

「言うな、今のはやり過ぎたって後悔してる」

「ならいいんだけど、あの子を泣かせたら風穴よ！」

ああ、やっぱり他のやつから見てもあいつはいい子なんだな・・・

「今後気をつけるさ」

「さて、日向には悪けどそろそろ行くわよ」

アリアが言う

「了解だ」

「じゃ、これ持って付いて来なさい」

そう言っアリアは俺にトランクを差し出してくる

俺は召使か！

まあ、いつも日向のも持ってやってるのでこれぐらいはいいだろう

「ほら、さっさと行くわよ！」

アリアは既に歩き出している

「はいはい、わかりましたよ・・・」

俺はトランクを持ってその後を追うのであった

第06弾

俺は今アリアと一緒にキンジの部屋の前にいる

「ここね」

「ああ。データベースと下の郵便受けで確認したから間違いないだろう」

「あんたってホントに色んな情報を持ってるのね」

「そりや情報科インフォルマだからな」

「いくら情報科でもあんたほどの情報量を捌いているヤツなんてそうそういないわよ」

俺が情報を集めているのはどちらかというと趣味に近いしなにしてもこのトランク重いな

「なあ、そんなことどうでもいいから早くインターホン押そうぜ」

手が痺れてきたので俺は話をそらした

「それもそうね」

アリアも俺が辛そうにしているのに気づいたらしく、素直にインターホンを押してくれた

ピンポーン

ーシーン

返事がない

「留守なんじゃないのか？」

「そんなはずない！ 絶対いるわ！」

ピンポンピンポーン

さらにインターホンを鳴らすアリア

だが今度も返事がない

「やっぱり留守なんじゃー」

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン！

俺が言い終わるより早くアリアがインターホンを連打し始めた！

すると、中から人が歩く音が聞こえてきた

なんだ、キンジのヤツ居留守使う気だったのか

足音が玄関の前で止まり、ドアの鍵を開ける音がしてドアが開かれた

「誰だー」

「遅い！　あたしがチャイムを鳴らしたら5秒以内に出てくる！」

キンジが言い終わるより早くアリアはそう言った

「か、神崎！？」

キンジもアリアが来るなんて思ってもいなかったらしく、驚きを隠せないでいる

「アリアでいいわよ」

アリアはさも当然のようにキンジの部屋に入っていく

「お、おい！　勝手に入るな！」

キンジがアリアを捕まえようとするが、アリアが小柄なため屈むだけで避けられてしまう

「シュウ、そのトランク運び入れときなさい！　ねえ、トイレどこ？」

言いながらトイレを見つけたらしいアリアは、ドアの向こうに消えた

「だ、そうだから入らせてもらおうぞ」

「てっ、なんでシュウまでいるんだよ！」

「部屋に帰れないからお前のところに泊まろうと思って」

言いながら俺もトランクを持って部屋に入る

「また綴か？」

キンジも綴が俺の部屋に来ていることは知っている

「ああ、しかも今回は蘭豹とセットで2人とも酔っ払ってる」

「うわぁ・・・」

キンジが哀れみの目を向けてくる

「まあ、キンジの部屋に泊まれば問題ないしな」

「それはいいんだが何故アリアまでいるんだ？」

「それは――」

と、そこでアリアがトイレから出てきた

「ちょっと、飲み物ぐらい出しなさいよ！ 無礼なヤツね！」

開口一番にそれはないだろ・・・

「コーヒー！ エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！ 砂糖はカンナ
！ 1分以内！」

しかもコーヒー好きでもない日本人には縁のない品を要求しやがった！

キンジはそんなアリアの要求をスルーしてインスタントコーヒーを

出していた

いや、インスタントしかない、というのが正しいだろうな

アリアは出されたカップに鼻を近づけてふんふんやっている

「これホントにコーヒー？」

どうやらインスタントコーヒーを初めて見たみたいだな

まあ、貴族だし当然だろう

「それしかないんだから有り難く飲めよ」

キンジに言われて、アリアはずっとコーヒーを飲んだ

「・・・ヘンな味　ギリシャコーヒーにはちよつと似てる・・・ん
ー、でも違う」

アリアが生まれてはじめて飲むインスタントコーヒーの感想を洩らしている

「それしかないんだ我慢しろ　でだ、アリア俺に何の用だ？」

キンジが言う

それに対しアリアはとんでもないことを口にした

「あんたたち、アタシのドレイになりなさい！」

はい？

第07弾

「あんたたち、アタシのドレイになりなさい！」

えーっと、これはどういう状況なんだろうか？

「アリア、意味が分からないんだが？」

キンジが言ったので同調の意で俺も首を縦にふる

「わかんないの？」

「分かるかよ」

今度は俺が答える

「あんたたちならとづくに分かっていると思ってたのに。んー・・・でも、そのうち思い当たるでしょ。まあいいわ」

いや、思い当たるふしなんてないんだが・・・

「それよりお腹へったわ。ご飯まだ？」

突然押しかけという飯までせがむとは・・・

「飯なんてない。いつもコンビニで買ってる」

「コンビニ？ 下の小さいスーパーのこと？」

どうやらコンビニを知らないようだな

「なら一緒に行きましょ　ねえ、あそこには『ももまん』売ってるかな？　あたし食べたいな」

ももまんって・・・まだあんのか？

コンビニで弁当とももまんを買って戻って来ると、アリアは早速テールブルにももまんを広げて食べていた

てか、普通蒸し器の中のももまん全部買うか？

俺も弁当を出していると、キンジがアリアに質問していた

「で、ドレイってどういう意味だよ」

「強襲科アサルトでアタシとパーティーを組みなさい」

なんだと！？

「ちょっと待てよ！　キンジは元強襲科だからわかるが、なんで俺まで入るんだよ！　俺はずっと情報科インフォルマだぞ！」

確かに中学の時は強襲科だったが、俺は兵庫の武偵中出身だし中学時代の情報は俺がすべて改ざんした

「あら、よく言うわね。中学時代はSランクの強襲科だったくせに」

「なっ！　なんでそれを知ってる！？」

改ざんミスか？

「日向に聞いたら話してくれたわ」

ひ、日向だと！？

「でもビックリしたわよ　マスタース教務科で資料見たら中学も情報科になって
ったんだもん。アンタ、情報の改ざんまでできるのね」

「・・・意味はなかったみたいだな」

日向め・・・中学時代の体育の写真ばらまいてやる・・・

まあ、このままアリアと行動するいい機会だ

「・・・そこまではれたんならいいだろう、入ってやるよパーティ
ー」

「決まりね」

俺とアリアは握手を交わす

「で、キンジはどうするんだ？」

「俺は武偵を辞めるために強襲科からインクスタ探偵科に転科したんだ、悪い
がお断りだ」

ま、そうだろうな

「あんたが組むって言わないかぎり、あたしは帰らないわよ」

おーっと！ 神崎選手、強行策に出たー！

遠山選手、目を見開いて驚いてますねー

きつとあのトランクの中は宿泊セットなんでしょうねー

「と、とにかく、今の俺には今朝の実力はない！」

「今の？ てことは、今朝のはやっぱり何かあるのね？」

あーっと！ 遠山選手、墓穴を掘ったー！

「大体察しはついてるわ、何かがスイッチで発動するものでしょ」

しかも神崎選手、ヒステリアモードの事に薄々気づいています！

・・・さあ、お遊びはやめるか・・・なんか虚しかったし

「さあ、そのスイッチを教えなさい！ 1人でできないことならあたしも手伝うから！」

あーあー、アリア、知らないとはいえキンジを一発で落とせる発言をしゃがった

見てみる、キンジのヤツ耳まで真っ赤だぞ

ヒステリアモードの発動条件は、性的興奮だからなー

「だー！ わかったよ！ やってやるよ！ ただし一回きりだ俺は強襲科に履修する それで、一回事件を解決したら探偵科に戻る」

やっぱり落ちたな

「いいわ、どんな大きな事件でも一回よ」

アリアもそれで承諾する

「どんな小さな事件でもな」

キンジはそう言いながらアリアと握手した

第08弾

「さ、あんたたち出てってくれる？」

夕飯を食べ終わり、俺がパソコンで写真部に売りさばくための日向の写真を探していたとき、いきなりアリアがそう言った

「はい？」

俺が疑問の声を発する

「出ていくのはお前だろ。俺はパーティー組むって言ったんだからお前はここにいない必要がなくなったじゃないか」

キンジが俺の言いたいことを言う

そりゃそうだよな、ここはキンジの部屋でアリアがここにいるのはキンジとパーティー組むためだったんだから、キンジがパーティーを組むと言った以上ここに居座る必要はない

「今日はもう遅いし、泊まらせてもらおうわ」

「なんだと!？」

キンジが悲鳴にも似た声をあげる

まあ、アリアも女子だ（女子というよりお嬢ちゃんって感じだけだな）

何かの拍子にヒステリアモードになってもおかしくはない

「ここに泊まるのはわかったが、なんで出ていかなくちゃいけないんだよ？」

キンジが驚きのあまり喋れずにいたので俺が代わりに聞く

「そ、それは・・・そう！ 着替え！ 着替えよ着替え！ 着替え
るから出ていきなさい！」

「着替えぐらいなら隣の部屋で済ませればいいじゃないか」

「うゝ！ なんでもいいから出ていきなさい！」

言いながらアリアが太ももからガバメントを抜いたので俺は慌てて
呆然としたままのキンジを引っ張って逃げ出した

そのまま玄関を出て先程のコンビニまで着いたところで

「と、泊まってくだー！？」

キンジが我に返り、そう叫んだ

「遅いわ！」

言いながら俺はキンジを軽く殴る

「今日のところはヒステリアモードにならないように頑張っておご
せ」

「・・・わかったよ」

キンジもさっきまでのやりとりでアリアが引かないことは理解したらしく、簡単に引き下がった

「とりあえずなんか買ってくか。店の前であんだけ騒いだんだからな」

「そうだな」

俺たちはお詫びの印に雑誌を1冊ずつ買って帰った

部屋に着いたのはいいが、入った瞬間撃たれるのも嫌なのでそっと玄関を開ける

しかし、撃たれるどころか気配がない

首を傾げながら中に入ると風呂場の方から水の音がした

水の音？

まさか！

俺たちは足音をたてないようにして風呂場に行くと・・・いた

扉越しにアリアのシルエットが、シャワーを浴びていたのだ

てことは、さっき追い出されたのは風呂に入るためだったんだな

扉の前には脱ぎ捨てられたアリアの制服からガバメントと日本刀が

見える

これはヤバイ

帰ったのがばれる↓風穴or切り刻まれる・・・

ヤバイ！ いや、ヤバイを越してヤヴァイ！

と、そこに

ピン、ポーン

と慎ましい感じのチャイムが鳴る

こんな時に誰だ！

と、隣を見るとキンジが青い顔で

「白雪だ・・・」

と、呟いていた

し、白雪だと！？

ヤヴァイどころの騒ぎじゃない！

もし、あのキンジ大好き白雪にアリアがいることがばれたらこの部屋は戦場になる！

ここは居留守を、と思った矢先、キンジの足がもつれて壁にぶつか

ってしまった！

「キンちゃん？ 大丈夫？」

ぶつかった音は白雪にも聞こえたらしく、逃げ場はなくなった

「あ、ああ大丈夫だ」

キンジが平静を装いながら、ドアを開ける

俺は保険として洗面所に待機

覗いて見ると、巫女装束の白雪が何やら包みを持って立っていた

「な、なんだよお前。そんなカッコで」

キンジがこちらをチラ見しつつ、ぶっきらぼうに対応する

「あつ、あのね 私、授業で遅くなっちゃって・・・キンちゃんにお夕飯をすぐ作って届けたかったから、着替えないで来ちゃったんだけど・・・い、イヤだったら着替えてくるよっ」

「いや別にいいからっ」

本気で着替えてきかねないムードの白雪を制止するキンジ

白雪の言う授業とはS研のことだろう

S研とは超能力^{SSR}捜査研究科という名前からしてヤバそうな専門科目の略称だ

「ねえキンちゃん。今朝出た周知メールの自転車と単車の爆破事件って・・・あれ、もしかしてキンちゃんのこと？」

「あ、ああ。俺だよ」

キンジが早口で答えると、白雪は文字通り10センチぐらい飛び上がった

「だ、大丈夫！？ ケガとか無かった！？ て、手当させて！」

「俺は無事だからっ。触んなっ」

「は、はい・・・でもよかったあ、無事で それにしても許せない、キンちゃんを狙うなんて！ 私ぜったい、犯人を八つ裂きにしてコンクリ・・・じゃない、逮捕するよ！」

今、ヤクザがよく使いそうな単語が出てきたような気がしたんだが・・・

「い、いいからっ。武偵高ではドンパチなんて日常茶飯事（こ）だろ。この話はこれで終了！」

キンジが無理矢理話を切り上げる

「は、はい。えっと・・・はい」

白雪もキンジに終わりと云われたので引き下がる

「・・・でも・・・その、今夜のキンちゃん、なんか・・・ちよっ

と、ヘンだよ?」

「へ、ヘン? どの辺が」

「なんか、いつもより冷たいような気が・・・」

「き、気のせいだ! そんなことより用事! 用事は何だよ?」

妙な勘ぐりを入れられてキンジが焦る

「あ、あのね。これ」

白雪はもじもじと、持っていた包みをキンジに差し出している

「タケノコごはん、お夕飯に作ったの。今、旬だし・・・それに私、明日から今度は恐山に合宿で、キンちゃんのごはん、しばらく作ってあげられないから・・・」

「あ、ああ。ありがとありがと。よし用事は済んだ。さあ帰ろう。な?」

と、そのとき

—ちやばあ

後ろのバスルームから水の音がした

白雪にも聞こえていたようで

「? 中に誰がいるの?」

と、キンジに問いかけている

「え、えっとその・・・」

キンジも焦ってまともに返答出来ていない

こうなったらしかたない

俺はパンツ一丁になり、頭を濡らしてバスタオルで頭を拭きながら
玄關の方に向かう

「どうしたキンジ？ 客か？」

「きゃっ。如月くん！」

パンツ一丁の俺を見て顔を赤くする白雪

「おお、白雪生徒会長どうした？」

「キ、キ、キ、キンちゃん！どうして如月くんが・・・！」

「えっとだな、実は今日シュウは家に泊まってくんだ」

キンジが冷静さを取り戻し、白雪に説明する

「そ、そうだったんだ・・・」

「さ、そんなことよりもう用事は済んだんだろ？」

「あ、うんそうだね。じゃあねキンちゃん、如月くん」

言いながら白雪は俺を見ているのに限界がきたらしく、さっきまでと違いすぐに帰っていった

「助かったぜシュウ」

「おう、そんなことよりだ」

「ああ、そうだったな！」

俺たちはバスルームまで走り、アリアの制服から武器を取り出す作業に入った次の瞬間――

アリアがおもいつき扉を開いた

「へ……ヘンタイ」

顔を真っ赤にして俺たちを睨むアリア

対する俺たちはパンツ一丁の俺とアリアの制服に手を突っ込んでるキンジ

「し……死ねー！」

言いながらアリアはキンジに飛び蹴りをくりだした

腹にアリアの蹴りをモロに食らったキンジが俺に飛んできて、俺は壁とキンジに押しつぶされたのだった

第08弾（後書き）

更新遅くてすいません

第09弾（前書き）

内容がなかなかまとまらなくて更新が遅くなりました。
これからをもっと早く投稿できるようにがんばります（汗）。

第09弾

俺は今屋上にいる。

理由は簡単だ。

あのままアリアの前にいたら確実に殺されるからだ……。

「……パンツ一丁はまずかつたな」

アリアの蹴りにより体中が悲鳴を上げているが、今回は100%俺が悪いので文句も言えない。

「しかしだ、アリアが寝るまでここで待つの暇だな……」

アリアが寝たらキンジが電話してくる事になっている。

だが今は8時、さすがにまだ寝ないだろう。

どうするかと考えていると電話が鳴った。

キンジか？　にしては早すぎる。

画面を確認すると登録はしていないが見知った番号だった。

「もしもし？」

俺は電話に出る。

「・・・仕事だ」

とだけ返事が来る。

「あんたからの電話は仕事しかないだろ」

「フツ・・・それもそうだな」

そう俺は・・・いや俺達の一族はとある仕事を、それこそ歴史の教科書に載っているような時代から代々請け負っている。

「で時間と場所は？」

「場所は新宿、今晚中にとのことだ」

「了解了解。報酬はいつもと同じように頼むぜ」

「ああ、わかっている。詳細は今パソコンの方にメールで送っておいた。いつも通り頼んだぞ」

そう言い残して電話は切れた。

ブレザーからパソコンを取り出して開き、メールを確認、削除してパソコンを閉じる。

「んじゃ、さっさといきますか」

そう言って俺はパソコンをしまいながら屋上から飛び降りるのだった。

この先は武偵法に引っかかることだからな。

また機会があったら話してやるよ。

翌朝、俺はアリアがキンジに朝飯を出すように怒鳴っている声で目が覚めた。

俺は怒鳴っているアリアを横目にモゾモゾと着替えた。

仕事をした翌朝はキツイんだよ。

昨日もこの部屋に帰ってこれたのは夜中の3時だ。

電車も終電がとくに過ぎてたから、新聞配達のおっちゃんのバイクに同乗させてもらった。

いつも使うバイクを失ったのが痛かった。

また武藤に新しいの買って改造してもらおう。

そう決めて着替え終わると、アリアとキンジが今度は玄関で揉めていた。

どうやら時間をずらして出ようとキンジが言ったことにアリアが突っかかってるようだな。

と、時計を見ると時間がやばかったので俺は懷から靴と缶コーヒーを出しながらベランダに向かった。

靴を履いて缶の蓋を開けてからベランダから飛び降りた。

無論、今は夜ではないので人目についても大丈夫のように腕にワイヤーを巻きつけている。

下に着地してワイヤーを離すと、キンジの部屋のベランダの手すりにセットしておいたワイヤー装置にワイヤーは回収されていく。

「さて、さっさとバス停に行かないとな」

俺はコーヒーを飲みながらバス停にむかうのだった。

第10弾

昼休み、屋上でいつもと同じように日向と昼食を食べていた。

「シュウくん昨日もご苦労様！」

日向が言う。

昨日とはもちろん仕事のことだ。

言っただろ？ 俺達の一族はって。

日向もその一族ってわけだ。

「なんだ、知ってたのか」

「だってあたしが断ってシュウくんを推薦したんだもん」

「断ったのか？ なんで？」

そう、仕事の報酬は基本高額で苦労しないものだ。

断る理由なんて普通はない。

「それは・・・その・・・。」

うつむきながら喋る日向の声が、だんだん小さくなっていく。

どうやら言いにくいことらしいな。

「言いたくないんなら言わなくてもいいぞ」

「そう？」

日向が上目遣いでこちらを見る。

その顔が可愛くて、いつも見てる顔のはずなのにドキッとしてしまった。

「あ、ああ。別に仕事を断るのは自由だしな」

「そうだよね！　ありがとシュウくん！」

さっきまでの表情が嘘のように日向は満面の笑みになる。

「さ、この話はもう終わりだ。　昼の学校でしていい話じゃないし、
昼休みが終わっちゃう」

「そうだった！　早くお昼食べちゃわないと！」

そう言って日向は弁当を急いで食べ出した。

昼食も食べ終わり、屋上をあとにして俺は日向と廊下を歩いていた。

「じゃあね、シュウくん。　あたし強襲科アサルトに行くから」

日向が強襲科に向おうとする。

「待て待て、俺も一緒に行く」

「え？ どうして？」

「アリアとパーティー組むことになったんだよ・・・強襲科で」

「へーそうだったんだ・・・って、アリアちゃんとか！？」

日向はかなり驚いたらしい。

「で、でもシュウくん強襲科にはもう入らないって・・・」

「ああ・・・誰かさんが余計なことをアリアに教えたせいでこんなことになっちゃったんだよ！」

「えゝ！ そ、それは・・・」

日向の目が泳いでいる。

「まあ、そんなのは過ぎたことだ。 もう気にしてない」

「ホ、ホント！？ よかった」

まあ、日向の中学時代の体育のきわどい写真をファンクラブに高値で売ったからな。

このあと俺は、強襲科で履修手続きをしてそのまま自分の部屋に帰ったのだが・・・。

部屋の前にはなぜかコーンが立てられていて、ドアがなくなっていた。

「なんだこりゃ・・・」

中を覗いて見ると部屋の中が煤と灰しかない。

「・・・どうしてこうなった・・・」

と、ショックのあまり部屋の前で跪いていると、隣に住む奴がやってきて

「ああ、お前の部屋昨日の夜蘭豹が『この部屋だけを消し炭にできる爆弾』とやらで爆破してたぞ」

「な、なんだとー！」

なんてこったい、やっぱりあの2人を放置するんじゃないかって・・・。

「ああ、あと業者さんが建て替えでもしない限り直せないって言ってたぞ」

「つまり俺の部屋はもう直らないと?」

「そういうことだ。」

そう言ってそいつは部屋に帰っていった。

これはキンジの部屋に住むしかないようだな・・・。

俺はキンジの部屋に無理矢理にでも住むと決めてその場をあとにす

るのだった。

第11弾

部屋がなくなったためキンジの部屋に住むことになった翌朝、俺は電話の着信音に起こされた。

時刻は8時半、完全に寝坊していた。

まあ理由は簡単だ。

昨日も仕事が入ったからだ。

二日連続で明け方まで働いたんだ、誰でも眠いに決まってる。

っと、そんなことより早いところ電話に出ないとな。

電話を手に取り通話開始ボタンを押す。

「んあゝ・・・もしもし？」

まだ頭が目覚めきってないためだらしない声を発する俺。

『シュウ！　今まで寝てたのかよ！』

「おうよゝ」

『じゃあさっさと頭を起こせ！　事件だ！』

俺はキンジの言葉に一瞬で目が覚めた。

「事件だと？」

『ああ、アリアから連絡が入った。女子寮の屋上に集合だそうだ』

「わかった、すぐ行く！」

そう言って俺は電話を切り、床に転がったままのブレザーを拾い上げて部屋を飛び出し、集合場所の女子寮に向かった。

「遅い！」

「ワリーワリー」

女子寮の屋上についた途端、アリアに怒られた。

まあ、俺が最後のようだし事件が起こってるんだ迅速に行動しなければいけないのはあたり前だ。

屋上には既にヘリが待機していて、C装備のキンジと狙撃科スナイプのレキがこちらは制服で乗り込んでいた。

ちなみにアリアもC装備だ。

「ようお二人さん、待たせて悪かったな」

先に乗っていた2人に声を掛ける。

「そんなのはいいから早く乗りなさい！」

「ゴブツ」

アリアに後ろから蹴られてへりに顔面から乗り込む。

「もいちよい丁寧に乗せてくれよ！」

「うるさい！ 遅刻してきたあんたに口答える資格はない！」

「・・・はい」

アリアが正論なのですぐに引き下がる。

俺の後にアリアが乗り込みヘリが離陸する。

「で、事件内容はなんなんだ？」

「バスジャックよ」

「バスジャック？」

「そ、あんたたちが乗る7時58分着のバスよ」

「なっ！ てことは武偵高のみんなが乗ってるのかよ！」

「そうよ」

「そうよって、何で武偵だらけのバスがバスジャックされたのを救助しなきゃならないんだよ？」

俺は当然の疑問をアリアに問う。

高校生とはいえ、武偵が何十人も乗ってる時点で事件は解決したも同然だからな。

「あんたたちのチャリジャックとバイクジャックの犯人と今回の犯人が同じだからよ」

「なんだと？ てことはあれか？ バスに爆弾が仕掛けてあるってのか？」

「そうよ」

「確証はあるのかよ？ それにSランクとはいえ高校生が気づいてるのに警視庁や武偵局の奴らは来ないのかよ？」

警視庁はともかく、武偵局はSランクの武偵がゴロゴロといるところだ。

アリアが気づいてあいつらが気づいてないはずがない。

「犯人は毎回減速すると爆発する爆弾をしかけて自由を奪い、遠隔操作でコントロールするの。でも、その操作に使う電波にパターンがあって今回もあんたたちを助けた時もその電波をキャッチした

のよ。東京武偵局は動いてるわ。でも、相手は動き回るバスよ？
準備が必要だわ」

「なるほど、そりゃそうだな。で、当のバスは今どこを走ってるんだ？」

「どこの停留所にも停まらずに台場に入ったらしい」

俺の質問にキンジが答える。

ちなみに俺以外は全員インカムを装着して通信科コネクトからの情報を聞いている。

「また随分と走ってるな。で、どういう段取りなんだ？」

俺がアリアに問う。

「バスを発見次第バスの上に強襲パラシュートで降下するわ。レキはヘリからサポートね」

「はい」

アリアの言葉にレキが答える。

「で、あたしたち3人が飛び移ったらキンジは中に入って状況確認、あたしはバスの外側に爆弾がないか探すわ」

「了解だ」

キンジが答える。

てっ、ちょっと待てよ。

「おい、アリア！ 俺はどうするんだ？」

まさか、人を呼び出しといて役割なしか？

「ああ、あんたは適当にバスの上から回りを警戒しといて」

「俺だけ扱いひどくね！？」

「だって、あんたの事件解決の成績がわからなかったんだもん。どんなポジションが向いてるのかわからないんじゃないじゃない」

確かに、中学時代の成績は全部改ざんしたんだ、日向が喋る以外でわかるわけがない。

「確かにそうかもな」

キンジもアリアに賛同する。

「それにあんたならその制服からその時の状況に合わせていろんな物が出てきそうだしね」

アリアが俺の制服を見ながら言う。

「わかったよ、上で警戒だな」

と、話しが終わったところでちょうどレキがバスを発見したらしく

「見えました」

と、相変わらず抑揚のない声で言ってきたのでレキが覗いている窓側にみんなで寄ってバスを探す。

が、バスは見当たらない。

「見えないぞレキ！」

キンジが言う。

「ホテル日航を右折しているバスです。窓に武偵高の生徒達が見えています」

レキがそれに答える。

そう言われて俺は懷から双眼鏡を取り出し、ホテル日航の方を見ると、いた。

「あれか・・・！ てか、双眼鏡を使ってやっと乗客の服装が見えるレベルなんだが？」

「そんなわけないでしょ！」

俺の言葉が信じられないのか、アリアが双眼鏡を俺の手からもぎ取って確認する。

「あ、あれが見えるの？ すごいわね。あんた視力いくつよ？」

アリアも確認できたようでレキに質問している。

「左右ともに6．0です」

なんちゅー視力だ・・・。

そんなやり取りをしていたる間に、バスが見通しの良い道に出たので俺達は強襲パラシュートを装着する。

この先はインカム無しではまずいので俺はパラシュートと一緒にインカムも着ける。

『じゃあいくわよ!』

俺がインカムを着けるの確認して、アリアがドアを開け、飛び降りる。

『先行くぞ、シュウ!』

言いながらキンジもドアから飛び出す。

にしても久しぶりだな、パラシュートを着けての降下なんて・・・。

『何してるのシュウ! 早く来なさいよ!』

先に降りたアリアの声がインカム越しに響く。

「そんじゃいきますか!」

言いながら俺はヘリから飛び出した。

パラシュートを操作してバスの上に降りると、すでにアリア達はそれぞれさつき決めた通りの動きをしていた。

「さて、なにも来なけりゃいいんだが・・・。」

と、言った矢先。

後ろからどうみてもスピード違反のオープンカー（多分ルノーだな）が近づいてきた。

嫌な予感しかないぞ。

と、バスに追いついたオープンカーはバスの横に付く形で走り出した。

運転席を見ると、案の定無人で、代わりにあの時のUZIが乗っていた。

しかもこちらに向いている。

「ヤバイ！ キンジ！ 例のUZIが横に付いた！」

『なんだって！ みんな伏せろ！』

キンジの声をインカム越しに聞きながらブレザーからCZを2丁取り出してUZIに向けて撃つ。

ダダダダダダン！

ダダダン！

一瞬バスがぐらりと揺れ、オープンカーに強くぶつかる。

俺の撃った弾はUZIに命中し、UZIを破壊したがあちらの方が先にバスの中目掛けて発砲していた。

「くそっ！ キンジ無事か？」

『運転手が撃たれた！』

「なんだと！？ 今止まると爆発するぞ！」

「わかってる！ だから代わりに武藤が運転してる！」

と、後ろから声がしたので振り返ると、ヘルメットを被っていないキンジが上に上って来ていた。

「お前ヘルメットはどうした！？」

「武藤に渡してきた！」

「そうかい・・・」

ヒステリアモードじゃないのにヘルメット無しキンジなんて危険すぎるが、今はそんなこと言ってる場合じゃない。

「アリア！ 爆弾はあったか？」

『・・・・・・』

アリアからの返事がない。

まさか、さっきのルノーにやられたのか？

「くそっ！ キンジ！ 周り見とくからアリアを引き上げろ！」

「わ、わかった！」

キンジがアリアの使っているロープを引き上げる。

と、そこに最悪のタイミングで前からさっきと同じルノーが迫ってきた。

「くそっ たれが！」

まだ距離があったのでCZをブレーザーに戻して背中からアンチマテリアルライフルのバレットM82を引き抜く。

「お、おいシュウ！ そんなの使うのか！？」

キンジが焦ったように言う。

「手段は選んでられないだろうが！ てか早くアリアを引き上げろ！」

俺はバスの前まで行き、ルノー目掛けて撃つ。

「ぶち抜けえー！」

ドン！

弾丸は見事ルノーを撃ち抜きルノーは爆発、俺は反動でバスの後方まで吹っ飛びバスから投げ出されそうになる。

「痛ってえ！ 肩外れやがった！」

「アリア！」

キンジが叫んだのでバレットをしまい、駆け寄るとアリアが頭から血を流していた。

「アリア！ アリア！」

そんなアリアを見てキンジが混乱している。

「落ち着け！ 息はしてるだろうが！」

キンジを落ち着かせながら周りを見ると、バスはレインボーブリッジを走っていた。

「ヤバいぞ・・・こんなもん都心で爆発したら大被害だ！ レキ！」

『はい』

インカムでレキに呼び掛けると、ずっと上を飛んでいたヘリから返事とともに、レキの顔が見えた。

「そこから爆弾が見えるか？」

『はい、確認できます』

「じゃあ撃ち落としてくれ！ お前ならできるだろ！」

『わかりました』

言ってレキは、ドラグノフのスコープを覗く。

『私は一発の銃弾、銃弾は人の心を持たない。 故に、何も考えない。 ただ、目的に向かって飛ぶだけ』

レキが狙撃をするときの暗示と思われる言葉が聞こえ、銃声とともにバスの下から何かが海に落ちる。

その何かが海中に沈んでいった瞬間、爆音とともに水しぶきが上がる。

「マジで撃ち落としやがった・・・」

レキの腕に驚いていると、まもなくバスが止まり、救急車とパトカーがやってきてエリアはそのまま病院に搬送された。

「やっちゃったな・・・」

俺は何もできずにエリアを見送るだけだった。

第12弾

バスジャック事件の翌日の昼休み、俺は屋上で調べ物をしていた。

アリアは昨日あのまま入院し、キンジはそのアリアの見舞いに行っている。

「にしても・・・入れ直した肩がまだ痛いぞ」

あの後、俺は救急隊員たちに肩を入れてもらったんだが・・・あれは痛かった。

「つと、そんなこと言ってる場合じゃないな」

そう、俺は今武偵殺しについて調べていた。

そもそも武偵殺しは半年前に犯人が逮捕されていて事件はもう解決している。

だが、模倣犯なんて言葉ではすまないような事件が今起こっている。

この矛盾点が気になるんだ。

「おっ、これだな・・・って、ちょっと待て！」

俺は武偵殺しに関する文書を読み出したが、犯人の名前を見て思わず声を上げてしまった。

それは犯人の名前に見覚えがあったからだ。

神崎かなえ

たしかにそう書いてある。

神崎なんて苗字は日本にそんなにいない。

そして一緒に貼られている写真。

これがアリアのガバメントのグリップに彫られていた顔と瓜二つだ。

つまりアリアの母親、なのだろう。

さらに、文書を読み進めると、不可解な点に気がついた。

それはそれまで一切なかった証拠や手がかりがなぜか逮捕日に一斉に上がっているのだ。

多分、アリアの母親はだれかに犯人に仕立て上げられたのだろう。

つまり、冤罪。

無実の罪だ。

「なるほどな。 これがアリアが突然転校してきたわけか」

アリアは無実の母親を助けるために真犯人が今の模倣犯が武偵殺しだと睨んで日本まで来たのだろう。

ああ見えても、あの家の血筋だ。

推理の才能はあるのだろう。

俺はパソコンをしまつて缶コーヒーを取り出す。

しかし、なんでアリアは俺達にこのことを話さなかったんだ？

自分でパーティーを組めとか言っときながら信用してなかったってことか？

悲しいね、言ってくれりゃ力使つて本気でやってやったのに。

「ま、今更そんなことで悩んでも仕方ないか」

アリアとはパーティーを組んだ身なんだ。

また次があるだろう。

「今度は本気でやってやるよ」

そう呟いて、俺は昼休みの終わりを告げるチャイムを聞きながら屋上を後にした。

第13弾

放課後、俺は武偵病院に来ていた。

もちろんアリアの見舞いに来たんだ。

が、受付で教えてもらったアリアの病室の前に来て呆然とした。

重傷でもないのに高校生で一人部屋ってなんだよ・・・。

まあいい、さっさと中に入ろう。

コンコンつとドアをノックする。

「どうぞー」

アリアの声が聞こえたので中に入る。

「よう」

「あらシュウ。あんたがお見舞いって悪いものでも食べたんじゃないの？」

「そんな皮肉が言えるようなら大丈夫だな」

「当たり前よ」

とアリアは言うが、その額にはどうみても一生モノの傷が見えた。

「・・・昨日は悪かったな。俺が敵に気付くのが遅かったばかりに・・・」

「過ぎたことなんだからもういいわよ」

俺が額の傷を見たことに気付いたらしく、髪で額を隠す。

「でも・・・あんたはわたしの探してた人とは違ったみたいね」

「かなえさんの冤罪を証明するためのパートナーじゃなかったってことか？」

「!!」

俺の言葉にアリアが驚く。

「・・・調べたの？」

「ああ、情報科インフォルマ・・・というか武偵だからな。必要な情報は自分で収集する」

「そう・・・」

アリアは顔を伏せる。

「しかし、なんでこんな重要なことを先に言ってくれなかったのかね」。言ってくれてりゃ――」

「やっぱりあんたもそうやって離れてくのね」

俺の言葉を遮ってアリアが悲しそうにそう返してくる。

「はい？」

「出てって！」

アリアが目には涙を溜めながら言ってくる。

「ちょっと待て！　話を最後まで聞け！」

「うるさい！　どうせ、話してたらパーティーなんて組まなかったとか言うんでしょ！　あんたの顔なんてもう見たくない！　さっさと出てけ！」

言いながらアリアが枕元からガバメントを抜き出したので俺は部屋から逃げ出した。

「話は最後まで聞いてくれよ・・・」

病院の入り口まで来た所で俺はそうつぶやいた。

あんたもってことは先に来てたキンジとも何かあったんだろう。

―言ってくれてりゃ本気で戦ったのに。

あの言葉はこう続くはずだったんだがな・・・。

第14弾

東京が強風に見舞われた週明け。

アリアは俺が見舞いに行った翌日に退院したらしいが、学校には来ていない。

それもそうだろう。

アリアはイギリスに帰るらしいからな。

奴を見つけるためにもアリアを止めるべきだったんだろうが、あれからアリアに会っていない。

会おうとしたが部屋を訪ねても留守だし、アリアの行きそうな場所が全く検討もつかなかったため会えなかった。

「はあゝ、どうすっかなゝ」

アリアが日本を発つまであと3時間ってどこか。

「シューウクーん！」

と、後ろの方から声が聞こえたので振り向こうとした瞬間、ドンッと誰かがタツクルしてきた。

「グホッ！」

俺はタツクルを喰らってそのまま倒れ込む。

こんなことしてくるのは・・・まあ、あいつしかいない。

「やった！ シュウくんを倒した！」

俺の背中に乗っかってそんなことを言ってるのは思った通り日向だった。

「・・・いいから降りろー！」

日向を背中に乗せたまま思い切り起き上がる。

「キャー！」

わざとらしい悲鳴を上げながら吹き飛んだ日向は、そのままバク宙して着地する。

「いきなりなにしゃがる！」

「いやゝ、シュウくんがあまりにも無防備だったから、つい」

テヘッと舌を出しながら言う日向。

「・・・この間回収してやった着替えの盗撮写真ばらまき決定、と」

「それだけはダメゝ！」

などと会話を交わしていると、電話が鳴った。

「待て日向、電話だ」

日向との会話を中断して携帯を取り出して画面を確認すると例の登録していないが見覚えのある番号だった。

「もしもし？」

『仕事だ』

「そうだろうとは思ったがめずらしいな、あんたがこんな時間に掛けてくるなんて」

『緊急の依頼なんでね。 今一人か？』

「いや、長月と一緒にだ」

日向は俺が名字で呼んだことで俺が誰と電話しているのか気付いたらしく、俺の携帯に耳をくつつける。

『なら丁度いい。 今回のクライアントはおまえたち全員をご指名でな』

「全員だと？ そりゃまた面倒そな依頼だな。 てか全員ってことはクライアントは俺達のことを知ってるやつか？」

こいつは俺達以外にも仕事を回してるはずだ。

その中で俺達をわざわざ指名してくるってことは俺達を知っているやつ、ってことだ。

『ああ、たしか椎名とか言っていたな』

「椎名って・・・あのババアかよ！」

「椎名さんってことは絶対に面倒な依頼だね・・・」

話を聞いていた日向も椎名という名を聞いて顔を青くしている。

椎名ってのは何故か俺達一族に昔からつきまとっている女だ。

しかも初めて一族の前に現れた千年ほど前から同一人物らしい・・・。

「まあいい、本題の仕事内容は？」

椎名の仕事は断るな。

これが一族に伝わる言い伝えだ。

以前断った先祖がなにかとんでもない目にあっただらしい。

『神崎・H・アリアの護衛、だそうだ』

「アリアの？」

どういうことだ？

日向にもさっぱりわからないらしく、頭に？を浮かべている。

『ああ、報酬は弾むそうだ』

「期間は？」

『わからん。 終了時にまた連絡をよこすらしいんでな』

依頼理由は不明、期間も不明とはな・・・怪しいにもほどがある。

だが願ってもないチャンスだ。

またアリアと行動できるんだからな。

「OK、その仕事引き受けた」

『わかった。他の奴らも引き受けてくれたんで、2、3ヶ月もしたら全員東京に集合するだろう』

「わかった」

『では健闘を祈るよ』

そう言って電話は切られた。

「さて、それじゃ行くか」

携帯をしまいながら日向に声をかける。

「はあ、せっかく高校生の間だけは仕事しないって決めてたのに・・・」

言いながら日向はうんうん唸っている。

なるほど、この間の仕事を断ってた理由はこれか。

「椎名の依頼は断るな、だ。潔く諦めろ」

「うゝ！ わかったよゝ」

「わかったならさっさと行くぞ。 後2時間半でアリアがイギリスに帰る飛行機が行っちゃう」

言いながら俺は既に走り出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1784u/>

緋弾のARIA —情報科の強襲科生徒—

2011年11月13日13時42分発行